

ツバキのはなし

はじめに

春を代表する木、それがツバキである。ツバキに「椿」の字をあてるのは、柗・榎同様、この木に季節―春を感じていたからにほかならない。古代日本人がツバキの名を与えた植物は、今でも我々が目にする常緑喬木である。

しかし、中国で「椿」の字が示す植物は、いわゆる「香椿」と呼ばれる、夏に花を咲かせる落葉喬木で、古来、長寿の木とされている『莊子』『逍遙遊』。日本のツバキとは別物なのだ。中国ではツバキのことを「海石榴」（海外から来た石榴に似た実をつける木の意という）・「海榴」・「山茶」と表記され、原産地は日本ともされる。日本でも「海石榴」「海榴」と表記されるが、

①海榴 字は或は櫛に作る

（出雲国風土記）

とあり、「椿」の字を当てることは、奈良時代から行われていた。¹つまり古代において、ツバキは春の木である、との認識が

広くあったことがわかる。

古くは「ツバキ」といえば、春に花を咲かせるヤブツバキ（ヤマツバキ）のことであつたとされている。それが近世・寛永年間以降になると、ツバキの改良が盛んになされ、400〜500種にものぼる種類があらわれるようになる。日本人は、ツバキを愛で、特別な思いを持っている。

そこで本稿では、ツバキに関する文学と民俗を通して、日本人のツバキ観を探ってみた。

一 春の木

『万葉集』には、

②河の上のつらつらつばきつらつらに見ども飽かず巨勢の春野は

（巻一・五六）

③奥山に八つ峰のつばきつばらかに今日は暮らさねますらをの伴（三月三日）

（巻一九・四一五二）

④あしひきの八つを峰のつばきつらつらに見とも飽かめや植

飯 泉 健 司

ゑてける君「三月四日」

(卷二〇・四四八二)

とあり、奈良朝貴族は春の木としてツバキを愛でている。うらかな春の日の喜びを実感させるに足る植物であった。春、美しく咲くツバキであるからこそ、防人歌に、

⑤我が門の片山椿まことなれ汝我が手触れなな地に落ちもかも

(卷二〇・四四一八)

というように、恋人の心変わりを心配しつつ旅立つ防人は、かわいく美しい「汝」妹をツバキの花に例えたのである。妹をツバキに例えるのは、歌垣(男性が女性に求婚して愛を育む行事)が行われる春と季節を同じうして花が咲くことと深く関わっている。恋愛を求める男女が各地から集まり、求婚する場、それはいくつもの道が集結する衛である。衛では、目印として樹木が植えられて市が開かれた。常に緑を保つツバキは目印としては恰好の木であったろう。ツバキの植えてある市は「海石榴市」とよばれていた。記紀・万葉集・風土記によれば、豊後国と大和国に「海石榴市」が存在していた。豊後では、ツバキが生えており『豊後国風土記』、大和の海石榴市では歌垣が行われていた『日本書紀』武烈天皇条。また『万葉集』には、

⑥海石榴市の八十の衛に立ち平し結びし紐を解かまく惜しも

(卷十二・二九五二)

⑦紫は灰さすものそ海石榴市の八十の衛に逢へる兄や誰

(卷十二・三二〇二)

のように、海石榴市における、男女の求婚の歌を載せる。歌垣が行われる季節は「春の山入り」などの民俗行事同様、春であつ

たと考えられている。ならば男女は、市のシンボルたるツバキ、そして美しく咲くツバキの花を目の当たりにしながら、愛の交歓を楽しんだに違いない。眼前の女性の美しさを属目のツバキをもつて表現するのは当然のなりゆきであろう。想像を逞しうすれば、ツバキの花が咲き、その蜜を求める蜂の出現する頃を待つて歌垣は催されたのではなからうか。

古代人にとってツバキの花は、生命の芽生え、性の解放を意味し、春の象徴、春の到来を告げる木であった。

二 照葉樹

ツバキを春の木としてその花を中心に見てきたが、一方で古代人はツバキが常緑樹である点にも注目している。日本では、古来、松などの常緑樹を聖なる木としてあがめる思想があった。ツバキもその例にもれないが、松のごとき針葉樹と違い、古代日本人は、ツバキが照葉樹である点に神聖さを感じ取っていた。『古事記』歌謡には、

⑧……葉は広ひろ斎いつ真ま椿つばき其そのが花はなの照しり坐まし其そのが葉はの広ひろり坐ますは大おほ君きみろかも (仁徳天皇条)

⑨倭やまとのこの高市たかちに小高こたかる市ちの高處たかところ新嘗屋にいなめに生なひ立たてる葉は広ひろ斎いつ真ま椿つばき其そのが葉はの広ひろり坐ましその花はなの照しり坐ます高光ひかりる日の御子みこに豊御酒献よみけらせ…… (雄略天皇条)

と謡われ、花の照る美しさと葉の広いことが「大君」の讚美となっている。「斎いつ」は、「斎いつ楓かえで」「斎いつ爪櫛つまみ」「斎いつ磐いわ村むら」とあるように神聖性を持つ語である。さらに注目したいのが、「葉は広ひろ」の語である。大君の「広ひろり坐ます」(ゆつたりとおいでになる)こととツバキの葉の広いことを結びつけている。

「広」とは単に葉が広いことのみを指しているのではない。春日祭祝詞にみえる「宮柱^{みやはしら}広知^{ひろち}り」という語句について、次田潤²は「宮柱太知^{みやはしらかし}り」（祈年祭祝詞）と同義とする。「太」とは「立派に」「しっかりと」の義である。「葉広」にも「立派」とか「しっかりと」の義が含まれているとすべきであろう。ならば「広り坐す」の「広」も単に「ゆつたりと」の義のみではなく、「太」にも通じる「立派」「しっかりと」の義もつことになる。だから「広」が大君讚美になるのであろう。「葉広」を冠する植物は、上代ではツバキとカシ（葉広熊柏^{はひろくまかし}）・垂仁記・雄略記）のみである。ともに常緑喬木で、葉は厚く、光沢をもっている（因みにツバキの語源説には「艶葉木^{えんやばき}」「厚葉木^{あやばき}」とする意見がある）。

光沢があり、しっかりとした厚く立派な葉をもつ点に、古代人はツバキの価値を認めていたのである。ツバキのもとに財宝を埋めたところ、宝は消え、ツバキの葉が黄金色に輝いたという伝説（新潟県柏崎市鯨波）なども、ツバキの葉に光沢がある点による。そして光沢のある葉を常に保つツバキに生命力と永遠性とを看取していた。ツバキのもつ神聖性とは、常緑樹であることに加えて、厚くしっかりとした、光沢のある葉をもつ照葉樹であることによる。

三 聖なる樹、ツバキ

『延喜式』神名帳には、ツバキを名に持つ神社が散見する。

⑩ 椿大神社

（伊勢国鈴鹿郡）

⑪ 都婆岐神社

（伊勢国河曲郡）

⑫ 椿岸神社

（伊勢国三重郡）

⑬ 椿神社

（近江国伊香郡）

⑭ 都婆只知上神社

（因幡国八上郡）

『延喜式』以外にも椿大明神（陸前国豆利郡下郡村）、都波岐明神社（信濃国筑摩郡村井町）もツバキを名に負う社である。

⑩ 伊勢の「椿大神社」には、ツバキの神木があり、御祭神猿田彦大神が影向したものと伝える（謡曲「鈿女」）。同様にツバキを神木とする社は、丹生大明神社（伊勢国飯高郡丹生村）『丹洞夜話』や、仲山金山彦神社（岐阜県不破郡南宮大社）『木曾路名所図絵』、金屋子神社（出雲国島根郡名分）『雲陽誌』などがある。また、出雲国神門郡大津村の道祖神は、社殿が無く、ツバキを御神体としていた『雲陽誌』。柳田国男³は、青森県小湊の椿山の椿明神などを例にとつて、「椿山」「椿崎」等の地名が付けられている土地には必ずツバキが生えており、神が祭られていると説いた。

謡曲「鈿女」では、伊勢の椿大神に「仲春椿の盛を相待ち」て御神楽を奉るといふ。仲山金山彦神社奥宮の高山神社の例祭（椿祭）は、ツバキの花の咲く頃（四月十五日）に行われる。ともに春の祭であり、ツバキの花が咲く姿に神の出現を看取していたのであろう。

春は田植えに先立つ準備期間で、儀礼的には山の神を田の神として迎える重要な季節である。そして神がやって来る兆し、さらに来たことを民衆に実感させるのは、多く鳥や動植物であった。ツバキも春を実感させる植物の一つであった。

逆の言い方をすれば、神が咲かせる花がツバキなのである。だから、ツバキのつばみや花によって農作を占う風習が各地に

残る（ちなみにツバキの語源説には、唾^{つばき}「占いに用いる」と同
源とするものもある）。『日本俗信辞典』³によれば、ツバキの花
が咲かない年は凶作（群馬県利根郡）といい、逆に寒中にツバ
キの花が多く咲いたり、つぼみが下向きにつくのは豊作の兆し
（山形県庄内地方）という。また、ツバキの花の多いのは豊漁
（宮城県）、丘のツバキの枝を折るとシラウオが来ない（福岡県
前原町）ともいう。占う内容は土地土地によって異なるが、根
幹にはツバキは神の意志を反映した木との認識が存在する。神
が降臨する木だから花は神の意志を表す。花の咲く状態は、民
衆の生活上、重要な関心事（農耕・漁労の吉凶）であった。

神の降臨する木―ツバキは、一方で神人の持つ杖ともなり、
不思議な靈力を有する木とも考えられるようになる。平安朝の
宮中では、正月の上卯日に「卯杖^{うづえ}」（魔を払う靈力をもつ杖）
を奉る行事があった。卯杖の中で最も量が多いのは、「焼椿
十六束、皮椿四束」『延喜式』大舎人寮と記されるようにツ
バキである。東大寺の「お水取り」で閼伽水^{あか}を香水に変える「牛
玉杖^{うしづえ}もツバキで作られる。伝説では偉人（聖德太子、弘法大師、
後醍醐天皇）がツバキの杖を地に挿し、根づいて大木になった
と伝える。杖立伝説はツバキ固有のものではないが、ツバキの
杖にも靈力があると信じられている。弘法大師といえは、手に
していた桧葉に「わが宿願果たして遂ぐ可くんば、此の葉、彼
の木（注―ツバキ）に生い付くべし」『塵添瑣囊抄』⁵と言って、
はたしてツバキに桧葉が付いて「桧葉椿」となった。偉人の意
志を反映する神秘的なツバキである。この「桧葉椿」の話の中
で、ツバキはウケヒ的な卜占に使用される。

同じくツバキを携えていた者に、八百比丘尼（人魚の肉を食
べて長寿を得て、諸国を歩いたと伝えられる）がいる。福井県
小浜の空印寺の八百比丘尼像はツバキを手にもっている。同じ
く空印寺内の、八百比丘尼入定の洞には、自らが植えたと伝え
るツバキが生えている。柳田国男・折口信夫は、女性の神人集
団がツバキの枝を各地に挿し、その成長によって神霊の意を占
うことがあったことを、八百比丘尼から推察している。八百比
丘尼が植えた木として比丘尼杉が著名だが、八百比丘尼を祀る
宗教者がツバキを卜占に用いたことは十分に考えられることであ
る。

青森県のイタコは、神降臨の依り代たる「イワコモリ」に使
用する七種の木の中の一つにツバキを用いる。⁸また、イタコは
ツバキで作った才槌を大切にするとか、オシラサマをツバキで
作る者もいるとかいう。さらに、口寄せの時、ツバキで作った
槌を縁の下に隠しぶらさげておくと、占いが当たらなくなると
いう。これは、巫女の知らぬ間に、招かざる神霊や邪霊が縁の
下のツバキに降りてきて占いの妨害をしているのである。巫女
がツバキと深く関わる背景には、ツバキには神が寄り付く、と
の考えが存在する。ツバキは神の降りる木、神霊の意志を示す
木であったのだ。

四 禁忌の木

ここまでではツバキを神の木として見てきた。しかし、民俗の
中にはこの木を不気味かつ不吉な木と捉える例も少なくない。
近世の記録によると、ツバキの朽木が夜に光る『大和本草』
とか、ツバキに六、七才の小児の手が生じた『見聞雜記』と

かいう。実際には、光りを放つ菌や餅病と呼ばれる病害によるものである。

またツバキは、化けるともいわれる。天井を雷のような音が歩き回るのは、大工の棟梁が天井に置き忘れたツバキの木で作った槌のせいであるといい、和歌山の天方氏の邸では、門を閉じると暴れる天狗はツバキの木の上に出現するという。^⑩山の神・宗教者の変わり果てた姿と言われる天狗が登場するのは興味深い。神秘的な木であるが故に、下級の精霊・邪霊たちもこの木に宿ると考えられたのである。

その他には、屋敷内に植えない、枝を折ってはいけない、花を頭に挿すと病氣・氣違いになる、祟る、病人の見舞いに持つていくことを忌む、ツバキの木で道具を作ることを忌む、などの言い伝えが各地にある。^⑪

ツバキを忌む信仰の背景には、近世以降の武家の風習（ツバキの花の落ちる様に首の落ちる姿を連想し、ツバキを嫌う）の影響もあろう。しかし、忌む理由について、「お寺の木だから」「墓に捧げる木だから」とする土地があることからすれば、原始的にはやはり、聖なる木であることに基づいての忌みであったことがうかがえる。神霊の依り代たる聖樹だから、一般人が触れることを戒めるために如上の言い伝えは発生したものと考えられる。頭に挿すと氣違い・病氣になるとするのは、花に降り来た神がその人に憑依してしまうからだろうし、「枝を折るな」というのも神の木であるからだろう。

青森県小湊椿山の椿明神の伝えでは、約束した男が戻って来ないことを悲しんで女は入水する。その後男は戻ってきて土産

のツバキの実を蒔き、ツバキが生えたという。だから、ツバキを折ると、入水した女の霊が現れると伝える。これなども、「折るな」の禁が神霊への敬意の表れであることがよくわかる。聖なるものが聖なるが故に忌み避けられ、時代の移り変わりの中で不吉なものへと変身してしまう、そんな聖なるものの宿命をツバキもたどらねばならなかった。

おわりに

ツバキは春の木として、神の意志を示す聖樹であった。そのため実用的な道具類に用いられることは少なかった。近世以降、その油が珍重されるようになるが、それ以前は殆ど使用されなかったようだ。

ただし『日本書紀』景行天皇条、『豊後国風土記』には、ツバキの木で武器を作った旨を伝える。極めて堅い材質なので、武器としては適していた。南方熊楠も、犬殺し・人殺しのための「毒木」としてのツバキをあげる。ツバキは、材質が固いことに加えて、相手を倒す靈力を有していたのであろう。

いずれにせよ花・葉・幹がもつ特異性のために、ツバキは人々に讃美されたが、逆に人を遠ざける結果をも招いてしまった。

注

(1) 古代日本において、ツバキに「椿」字を用いることは、七〇〇年前後に定着していた（瀬間正之『記紀の表記と文字表現』おうふう、二〇一五年二月）。

(2) 次田潤『祝詞新講』明治書院、一九二七年七月

(3) 柳田国男『椿は春の木』『定本柳田国男集第二巻』筑摩書房、一九六八年七月

(4) 鈴木棠三『日本俗信辞典』角川書店、一九七二年一月

(5) 柳田国男『日本伝説名彙』日本放送出版協会、一九五〇年三月

(6) 柳田国男前掲書、注(3)

(7) 折口信夫「花の話」『折口信夫全集第二卷』中央公論社、一九五五年十二月

(8) 桜井徳太郎『日本のシャマニズム 上巻』吉川弘文館、一九七四年一月

(9) 白井光太郎『植物妖異考』岡書院、一九二五年一〇月

(10) 南方熊楠「桜を神木とすること」『南方熊楠全集 4』平凡社、一九七二年七月

(11) 前掲『日本俗信辞典』、注(4)

(12) 南方熊楠前掲書、注(10)

参考文献

和歌森太郎『花と日本人』角川書店、一九八二年二月

斎藤正三『植物と日本文化』八坂書房、一九七九年一〇月

宮沢文四郎『庭木の民俗誌』銀河書房、一九八五年一〇月

山田宗睦『花古事記』八坂書房、一九八九年八月

西川照子『神々の赤い花』平凡社、一九九〇年一月

日野巖『植物怪異伝説新考』中央公論新社、二〇〇六年六月